

特集 東日本大震災に想いを寄せて

① 忘れない3.11展

今年で6回目を迎える「忘れない3.11展」は、3月7日～12日まで小平市中央公民館で開かれました。終了後の実行委員まとめ会での話も交えて今年の様子を報告します。



今年も20団体以上が参加し、ギャラリーの他、ホールや視聴覚室、プロムナードも利用して行われました。いくつかのメディアにも取り上げられたことと、通りすがりの人々を会場受付で積極的に呼び込んだ甲斐があって、約1,200名（昨年より150名以上増加）の方々が来場しました。小平ビデオクラブが提供する映像は高い関心を集め、また展示物を見て「6年も経っているのにまだこんななの？」という驚きの声も聞かれ、福島から避難している家族の生のお話は聞いた方々の胸に強く響いたようです。最終日の午後にはホールで開かれたチャリティ・コンサートは、市内在住の音楽家の呼びかけに応じて20組以上の超一流の音楽家たちが集まり、満席の観客を魅了したとのこと。来場者の想いを書き留めるハートのメッセージも50枚近く寄せられ、「この取り組みを今後もぜひ続けて欲しい」という声が多かったそうです。協力した公民館側からも「社会教育の場である公民館の理念〈つどう・まなぶ・つながる〉が、実行委員同士、実行委員と参加者、参加者の間にもたくさん見られた良い企画だった。」とコメントがありました。



今回はもっと多くの団体に参加を呼びかけると共に、子どもを呼び込めるような企画やアピール、各団体の展示の仕方などを工夫し、早くから準備を始めようと申し合わせ、来年に向けての意気込みが感じられました。



マンホールトイレ

来年は2018年3月6日（火）～11日（日）、第1回目の実行委員会は5月20日（土）10:00～（予定）
*連2月号で予告したイベント日時に一部誤りがありましたことをお詫びいたします。

② 『ファシリテーション わたしたちにできること』（NPO 法人日本ファシリテーション協会発行）

これは、東日本大震災という未曾有の災害の中で、NPO 法人日本ファシリテーション協会（FAJ）が法人としてどのように考え、どのような事業を行ったか、さらにはひとりひとりのファシリテーターが現場でどのような振る舞いをしたか、2011年3月11日から2015年3月までの約4年間、ファシリテーションによる復興支援の可能性を探った活動の記録集です。

“ファシリテーション”とは、「人と人、人とコトとの関わり方に働きかけ、集団による学習や問題解決、未来創造などの場においてプロセスと結果がよりよいものとなるよう支援・促進すること」と本書では解説されています。FAJは、そのファシリテーションの普及を目指して作られた民間の非営利団体で、2016年7月現在約1,800名の会員が活動しています。とはいえ、他に本業を抱えているため、「できるときに、できることを、できる範囲で」というボランティアな活動で運営しています。しかし、震災後2週間あまりでFAJは災害復興支援室を立ち上げます。そして活動の柱を①地域コミュニティの再構築・住民主体の復興支援、②支援機関同士のネットワーク強化と位置づけました。

①の例として、釜石復興まちづくりワークショップでは、すべての発言を模造紙に見える化し、またそれをワークショップ終了後も掲示することで多くの市民

が話し合いの様子を知ることができました。南相馬市では、「何かしたいと思って集まるが話し合いがうまくいかない」という悩みを抱えた団体からの依頼でミーティングに参加。すると、紙とペンがあれば話し合いが前に進むことを体感した団体メンバーが「多くの人がファシリテーションを学べば南相馬はもっとよくなるのではないか」と感じ、ファシリテーション講座を開催。その後、当事者の主体性が出始めるにつれてFAJはサポート役に回っていきます。②の事例は、震災の翌月に立ち上がった東日本大震災支援全国ネットワーク主催の災害ボランティア・NPOと省庁の連絡会議。質問したい人だけが質問したり、現状に不満や文句を言う人や延々としゃべり出す人も出始め、「支援団体同士が話す場がないのはもったいない」と感じたことから、連絡会議のあり方・進め方を提案、その後は東京と現地をスカイプやメーリングリスト等で共有して支援しました。

ファシリテーションで何が可能かを模索し続けた記録である本書を読み進めながら、随所に共感と納得のアンダーラインを引く結果になり、とても重みのある指南書に思えました。

（文責：田原）

